# あとがき

イエメンのキャッチフレーズにはしばしば「アラブの秘境」「中世へのタイムスリップ」など、「変わらない伝統」を強調する言葉が使われる。しかしグローバリゼーションが地球をおおう現在、イエメンとて「開発」や「近代化」の大きなうねりから無縁ではあり得ない。それゆえ、いかに「伝統的」に見えるモノであっても必ずやそのどこかに「現代」が入り込んでいる。その入り込み方、あるいは入り込むことへの抵抗のプロセスに注目すると、そこにイエメン社会の本質が見え隠れする。

本書を書き終えて、あらためて自分が「近代」と「伝統」のせめぎ合いに興味があるのだということに気づかされる。それは単に伝統的なモノがどう変化していくのかという問題にとどまらない。中世的・伝統的倫理観の権化のように言われる「カビーリー」たちが彼らの行動様式・価値規範をどのように変化させていくのか、それが「モノ」のありようにどんな影響を与え、また逆に外界から流入してくるモノによってどんな影響を与えられ

るのか、が私にはとても気になる。それは本書で最も頻繁に出てくるアラビア語が「スーク」と並んで「カビーリー」であったことに現れている。そして「男と女」のあり方の変化の行く末もまた、同じ意味で私の関心の焦点である。

それにしてもこの二十年の間に、日本とイエメンの関係はずいぶん変化した。この間にイエメンを特集する日本のテレビ番組は十数本放映されたし、パックツアーで訪れた観光客は数百人に上る。本文に触れたように観光ブームは一時的に停滞したとしても、若いバックパッカーの間でのイエメン人気は確実に高まっているようだし、何よりうれしいのはイエメンを研究対象にする若手研究者が少しずつ増えてきたことである。二十年前には、日本でイエメンについて語り合う相手を見つけることなど出来なかったものだ。もちろん「イエメン？ああ、アフリカの国ですね」という人はまだまだ多いけれど、イエメンと日本との距離は少しずつ縮まっている。前著『イエメン――もうひとつのアラビア』同様、本書を通して、イエメンという国と人々が日本人読者にとってまた少し「身近」なものになれば、幸せである。

二〇〇一年　春

佐藤　寛